宮沢賢治記念館通信

発行　〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1－1－36　宮沢賢治記念館　☎(0198) ３１－２３１９　FAX (0198) ３１－２３２０

春と修羅と私のこと

イラストレーター　塩川いづみ

病室の壁は柔らかいクリーム色で、見上げたところに小さな木製の十字架がかかっている。宮沢賢治の「春と修羅」を開くといつも浮かぶその光景。その日私は手術を明日に控えて入院をしていた。

東京で美大を出てすぐにイラストレーターとして仕事を始め、12、３年が経った頃。仕事も増えて締切に追われながらがむしゃらに絵を描く日々を送っていたある日、腹部に大きな腫瘍が見つかった。担当医から「サイズが大きくて周囲の臓器にも支障が出ているから早めに取りましょう。良性か悪性かは摘出してからの検査で」と言われ、いよいよその日が来たのだった。薦められた病院は入口に白いマリア像が立っていた。

初めての場所で１人、不安と心細さから何かをしていたかった私は持ち込んでいた仕事の資料に手をつけた。その一つが宮沢賢治の詩集だった。これまで親しんだ多くは「銀河鉄道の夜」や「注文の多い料理店」などの童話だったけれど、賢治の詩に絵を添えて本を刊行するというこの仕事が楽しみで、気晴らしにもなるかなと思って病室にも持ってきていたのだった。そして出会ったのが「春と修羅」だった。

本を開くと、私は病院のベッドにいることを忘れてしまうくらいに夢中でそれを読み、浮かんだイメージを次々にスケッチしていった。文字も写経のように描いていたので、それを見た看護師さんはギョッとしたに違いない。その時の私をふんわりと包んでいた死の予感や、抗えないことへの諦め、そして無事手術を終えた暁にはいまの暮らしを変えるんだという未来への希望などが混じり合った、特異な心情が相まって、この時はこれ以上ないほど賢治の心象スケッチに共鳴してしまっていたのだと思う。
駆け足だった日常から一転、エアポケットに入ってしまったような時間の流れと、顔を上げると目に入る十字架も、非日常をかもしていてその時をより印象的にしていた。
（のちに春と修羅の背景として賢治と妹の死、そして賢治と法華経についても知り、束の間ではあったけれど近い思いを追体験したような気持ちにもなった。）

摘出した腫瘍は幸い良性で、６年経った今も問題ないので手術も成功していたのだと思う。そしてこの時に描いた「春と修羅」の絵は、退院後torchpressという出版社から『春と修羅 Spring&Asura』というタイトルで出版され、有難いことに昨年重版になった。
“
わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといつしよに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
（ひかりはたもち　その電燈は失はれ）
”
この序文の、「私は現象にすぎないんだ」という賢治の宇宙観が、その後の人生においてたびたび私を救ってくれている。どうにもできない現実に対峙すると頭に浮かび、物事を俯瞰して捉えて、思い詰めている気持ちを和らげ、視界を広げ、希望の光をもたらしてくれる。自分は大いなる宇宙の一部にしかすぎないと思えばなんとなく納得がいくことがある。

そして、なにより本を出したことがきっかけで、宮沢賢治をめぐるという岩手への取材旅の依頼をいただいたり、現在はなんと最前線の宇宙科学を伝えるアカデミックな施設でも、「春と修羅」にまつわる絵を描かせていただいている。宇宙を研究している学者の方々にも宮沢賢治ファンが多いことを知った。
春と修羅がパスポートになり、広げてくれる世界。今となっては、あの手術があってこの本が作れたのだから怪我の功名だったな、なんて思ったりしている。

「比叡（幻聴）」の光景

茨城女子短期大学名誉教授　小野孝尚

賢治の詩に「比叡（幻聴）」がある。賢治は、父政次郎に誘われ大正10年４月初旬に伊勢参りから比叡山伝教大師1100年遠忌参詣の旅行に同行した。この時賢治は「比叡」と題して12首の短歌を制作。「比叡（幻聴）」（［新］『校本宮澤賢治全集第３巻詩Ⅱ　春と修羅・第２集』）には、作品番号が145とあり、1924・５・25とあるので、この旅の３年後の大正13年５月25日に着想された。

比叡（幻聴）

黒い麻のころもを着た
六人のたくましい僧たちと
わたくしは山の平に立ってゐる
　それは比叡で
　みんなの顔は熱してゐる
雲もけはしくせまってくるし
湖水も青く湛えてゐる
　（うぬぼれ　うんきのないやつは）
ひとりが所在なささうにどなる

衣は、材質によって麻衣・紙衣・絹衣などがある。「六人のたくましい僧」は、比叡山ゆかりの宗祖最澄・法然・栄西・道元・日蓮・親鸞のことであろう。「山の平」は大講堂あたりか。「それは比叡で」は、前文を受けた倒置法的表現で「比叡」を強調。「熱してゐる」は、初めは「ほてっている」であった。激しく熱する僧たちの情熱が窺える。「雲」についても「雲もけわしく山の上までせまってゐるし」と圧倒するような勢いで押し寄せる雲であった。草野心平は『わが賢治』（昭和45年５月　二玄社）の中で「雲の大部分は自然現象として、その美しい雲が約半分で、残りの大部分は地上での農民生活と関連しており、他の雲には賢治の『宗教』がうつって流れているものである。」と分類されている。「湖水」は琵琶湖。眼下の湖が強く印象に残っていたものであろう。「湖水も青く」と青色を表現。賢治が参詣した当日の短歌「比叡」の中にも２首「みづうみ」が歌われている。

みづうみのひかりはるかにすなつちを掻きたまひけんその日遠しも

みづうみは夢の中なる碧孔雀まひるながらに寂しかりけり

「碧孔雀」には、「孔雀青」の色彩感が含まれていよう。孔雀の青い羽の色のことで、明治の頃西洋から伝わったピーコックブルーの和訳。

『宮沢賢治の色彩感』（出口聖子　四次元　昭和35年３月）によると「多くの色彩中で作品に最もよく現れるのが青である。この青は作品の殆ど全体にわたり散見される故、賢治が最も深い興味と関心をもった色であろうと思われる」とあり、その後に「白」「赤」「黒」「黄」が続くとある。青が最も多く次に白、赤、黒、黄と上位五色の色彩は、仏教で言う所の五正色（信、精進、念、定、慧）の五根に関係するものかも知れない。短歌「比叡」の「大講堂」の詞書がある短歌の中にも２首「五色の幡」が出ている。

更に『現代の心理学』（昭和28年11月　培風館）では、「一般的な心理学では青を中心とする諸色彩は瞑想的で、安静で広々として高慢である」とある。賢治の「比叡（幻聴）」での「湖水も青く」は一般的な心理学と共通したものがあろう。又『宮澤賢治童話における色彩語の研究』（大藤幹夫　日本図書センター　平成５年６月）によると、童話のことではあるが、「『青』の対象のほとんどが自然に向けられている。（中略）賢治が表現した自然は、自然であると同時に自我であったといえる。賢治自身が自然と一体になったところに生まれた」と書かれている。このことは、「比叡（幻聴）」にも又いえることであろう。「（うぬぼれ　うんきのないやつは）」のフレーズが幻聴。「うぬぼれ」は、思い上がり、傲慢なこと。「うんき」は運気で運勢。ここは賢治のこと。「所在なささう」は、手もちぶさたな様子。「どなる」は、大きな声で叱ること。

幻聴とは、実際には声はしないが、聞こえるように感じることである。この幻聴は、賢治の心の中にあるネガティブな感情が元となっていよう。父の浄土真宗信仰と自分の法華経信仰について、父との信仰上での対立があり、あまりにもか

たくなな自分を責める気持ちが攻撃するような幻聴となって聞こえてきたのではないだろうか。父は、この旅行を通して賢治に幅広い目を持つことを望んでおり、賢治も又、それを認識した上での回想的心象スケッチ「比叡（幻聴）」となったものと思われる。

賢治の短歌「比叡」の「根本中堂」の詞書のある１首が根本中堂の向かいに昭和32年９月21日に歌碑となって除幕式が行われた。

ねがはくは　妙法如来正徧知　大師のみ旨成らしめたまへ

「妙法如来正徧知」の「妙法」は法華経のこと。「如来」「正徧知」は仏に対する十種の称号の一つ。み仏の願いがあって全ての人が救済されること。「大師のみ旨」については「伝教大師発願文」の其の五に「付して願わくは、解脱の味わい独り飲まず、安楽の果独り証せず。法界の衆生と同じく明覚に登り、法界の衆生と同じく妙味を服せん。」とある。賢治が『農民芸術概論綱要』の序論の中で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と照応する。「成らしめたまへ」は、伝教大師最澄が根本中堂建立の時に歌われた「阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我立杣に冥加あらせたまへ」の大願成就を望んだもの。これらの総ては「妙法」という太い絆で結ばれている。

※引用の短歌は原文に句点が入っています。

▲比叡山根本中堂前の宮沢賢治詩碑と筆者
（平成8（1996）年7月31日撮影）

宮沢賢治の旅

あゆみカウンセリングルーム　青山正紀

私は若いころから、人の心に関わる仕事をしてきました。はじめは郷里の新潟県で、精神科の病院で働いていました。30年近く前に花巻市石鳥谷町の皮膚科で働くことになり、引っ越してきました。すると教科書や絵本で親しんできた宮沢賢治と、あちこちで出会うのです。朝昼夕には、10キロ先の市庁舎から賢治の曲が流れます。賢治が愛した岩手山に、自分で登ることもできます。折に触れて賢治の人となりに思いをめぐらす、そんな旅をしてきたようにも思うのです。

岩手県に住んで初めのうちは、かなり人情風土を意識していました。こちらの人は生真面目で、仕事はできるうちに片づけてしまいます。公の場では人を立てて、秩序を重んじます。また個人よりも、「家」の存在が大きいとも感じました。

そんな土地柄からしたら、賢治の生き方は異端です。長男でも家業を継がず、詩作や音楽に現を抜かすとあっては、周囲の人々から白い眼で見られていたことでしょう。「子どもの頃に、宮沢先生を見た」という人は、「小学生から石を投げられて、だまっていた。いまになって賢治、賢治ってもてはやすのはおかしいようだ」と教えてくれました。

それでも賢治は、「世の中を良くする」ことを

目指していました。折しも賢治が21歳のときに、ロシア革命が起きました。でも賢治は「革命が起きたら、私はブルジョアの味方です」と語り、「革命という手段は好きではない」とも言ったそうです。「ビヂテリアン大祭」では、菜食主義の是非をめぐる茶番劇が描かれています。私は賢治が舞台を「ニュウファウンドランド島」にすることで、革命の矛盾を説いているように思います。北の果てで菜食をしている長老は、魚や獣を売りさばいることでしょう。肉食しないために殺生をしているとしたら、滑稽なお話です。

賢治が「好きな手段」とは、科学だったのでしょう。農地に合わせて書いた肥料設計書は、２千枚に及ぶそうです。当時の農民には肥料を買うお金もなく、実を結びませんでした。時代に先んじた不幸はあったかもしれませんが、賢治は科学の技術をもって変化をもたらそうとした、合理的な人だったと思います。

賢治にとっては、音楽も「好きな手段」だったようです。西洋音楽には数学の要素があって、楽譜は数式のようなものですから、気に入ったのではないでしょうか。そして「セロ弾きのゴーシュ」は、まるで心理療法の論文のようです。お終いに楽長は「やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君」と言う一方で、「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな」と言いました。ゴーシュが音楽で感情を表現できなかったのは、心を閉ざして自分を解放できなかったのです。その生き方を十日かそこらで変えたら、死んでしまうかもしれません。その嵐をかっこうにぶつけてしまったゴーシュは、「あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃなかったんだ」とつぶやきます。心の働きを観察する、科学的な視点をもっていないと、このお話は書けないと思います。

世間での賢治の人物像は、存命中は優秀で風変りなお坊ちゃん、亡くなってからは「雨ニモマケズ」の奇特な人、という感じでしょうか。科学の実践家として賢治を見ることができたのは、直に教えを受けた人々に限られていたと思います。

「北守将軍と三人兄弟の医者」は賢治の晩年に、「児童文学」に掲載されました。ソンバーユ将軍は狐や怪鳥に悩むことはあっても、敵に遭うことなく三十年も砂漠をさまよいました。ついには馬と一体となり、それを三人兄弟の医者に癒してもらいました。最後は仙人になったのか、ひとりの男として死んだのかも分かりません。私には死期を悟っていたであろう賢治の、自らの鎮魂のように感じられます。科学をもって人の世を良くしようとはしたけれど、理解されることもなかったし、敵に遭うこともなかったのです。

先覚者の栄光は後世に現れ、孤独は死ぬまでつきまといます。それは仕方のないことかもしれませんが、私たちが賢治の精神を引き継ぐことはできます。それは観察と法則性を重んじる、科学の姿勢です。科学が究極まで進歩したように見えて、私たちは忘れているのです。ネットの書きこみをその通りに受け取る人の、何と多いことか。ウソでも思いつきでも、あっと言う間に共有されてしまいます。いまの時代だからこそ、賢治の精神は活きてくるように思います。

私のいまの仕事は、街中の小さな相談室でお客さまの話を聴くことです。心安らかに人生を楽しめるようになる、そのお手伝いと言っても良いかもしれません。お役に立ちたい気持でありつつも、心理学の観察と法則性を忘れずにお会いしていこうと思います。私の「宮沢賢治の旅」は、これからも続くことでしょう。

結い ―賢治が繋ぐ心と心―

賢治さんの短歌と謎

歌人　大西久美子

「はんの木（ぎ）の／みどりみぢんの葉の向（もご）さ／ぢやらんぢやららんの／お日さん懸がる。」

あ、「鹿踊りのはじまり」に出てくる鹿の歌！と気づかれた方は多いでしょう。でも、反射的に短歌へ連想が飛ぶのは中々難しいのではないでしょうか。私も教えていただくまで分かりませんでした。大好きな物語で繰返し読んでいたのに、です。

賢治さんの文学の始めが短歌であったと知ってから数年後、「賢治短歌」の第一人者・佐藤通雅先生のご監修による「宮沢賢治の短歌」（「ＮＨＫ短歌」で2016年４月号～2020年３月号まで連載。９名の現役歌人が参加）で作品鑑賞を行う機会をいただきました。以来、賢治さんの短歌作品に魅了されると共に、多くの方々に知っていただきたいと強く願い、微力ではありますが賢治さんの短歌の紹介を機会あるごとに続けております。因みに、佐藤通雅編著『アルカリ色のくも　宮沢賢治の青春短歌を読む』（2021年２月20日刊・ＮＨＫ出版）には佐藤先生の「序」、「解説文」と共に「宮沢賢治の短歌」の鑑賞に参加した９名―内山晶太、大西久美子、尾﨑朗子、梶原さい子、嵯峨直樹、堂園昌彦、土岐友浩、横山未来子、吉岡太朗―の鑑賞録と梅内美華子氏の作成した「宮沢賢治年譜」が収録されています。私は連載当時の文に加筆したものを寄せました。場合によっては苦労の跡も見える歌人たちの多角的な鑑賞と佐藤先生の深みある解説に刺激される面白い本です。賢治さんの短歌の不思議を多くの方に語っていただく一助になれば嬉しいです。（写真・上）

ところで、私はいつ賢治さんの心象スケッチを知ったのでしょう。ふと、偕成社が若い読者に向けて発行した『愛の詩集』〈ジュニア版日本文学名作選60〉が過りました。おそらく「永訣の朝」をこの本で知ったのです。全60巻のシリーズの見返し（写真・下）に文豪たちの落款が施されていますが、一つだけ手書きの温かみのある○で囲んだ「賢（けん）さ」の文字があります。きっと縁の人が賢治さんを呼ぶ声をイメージしたものだろうと長い間思っていたのですが、どこに聞いても―出版社にも尋ねました―出所が今のところ不明です。またぽっ、と謎の灯が点りました。私の心の中で賢治さんは楽しそうに微笑んでいます。この一文を目に留められた方の中に由来をご存じの方がいらっしゃったら、ぜひ教えてください。

未知への探求

花巻東高等学校１年　佐藤清美

私は賢治さんの母校の花巻小学校に通い、一年生の頃から賢治さんの人柄や作品によく触れていた。毎年賢治集会という学習発表会が開かれ、劇や詩の暗唱、歌を発表した。四年生の時には「賢治新聞」を作ったが、その時はなんとなく宿題だから書いた。しかし、六年生になったある日、転機が訪れた。小学校にある「星めぐり館」という賢治さんにまつわる物がたくさん展示されている部屋に行ったとき

だ。そこに踏み入れ、資料を全て見た後、私には「賢治さんについてもっと知りたい」という感情が芽生え始めていた。

その後中学生になり、ときどき宮沢賢治記念館や童話村に行く日々を過ごしているなか、「銀河鉄道の父」を映画館で鑑賞した。内容は知っていたけれど、綺麗だと強く感じた。映像美ももちろん、賢治さんの人生や父政次郎さんの想いが細やかに表現されていて、圧倒された。この映画で、私はまだ知らない賢治さんの魅力があると感じた。

高校生では、先生や先輩と共に大迫振興センター内で賢治さんに関する講演でお話を聞いた。まだ深くまで賢治さんを知らない私には難しい話も多かったが、浅沼利一郎さんの「風の又三郎」の改変に関する話が一番心に残った。後から思い出してみるととても重大に感じて、軽く受け取ってしまったことを悔やんだ。なぜ変えなければならなかったのかという疑問が、ずっと頭の中に残っている。

令和六年度の九月二十一日の賢治祭では、詩の「松の針」を朗読した。最初、先生に朗読を誘われた時はあまり自信がなかったが、賢治さんを知りたいという想いは変わっていないので挑戦することにした。練習中はずっと「賢治とトシ」の関係性を考えて、相手に語りかける感じで朗読しようと心の中に留めておき、練習した。賢治祭での朗読は、練習した中で最高の出来だった。自分と朗読している自分が切り離されたような心地がして、とにかく楽しかった。会場全体が私を受け入れてくれている雰囲気があったのも、楽しく朗読できた要因なのかもしれない。賢治祭が終わった後、一人の女性に声をかけられた。私の朗読に感動したと言ってくれて、すごく心が温まった。そのことがあって、もっといろいろな場所で朗読をしてみたいと思った。その後機会に恵まれて、先生が所属している賢治の会や、全国高校生童話大賞表彰式のオープニングで朗読した。賢治祭とはまた違った緊張感があったが、やり遂げることができた。

今後は自分の表現の幅を広げたいと考えている。また、「松の針」以外の明るい詩にも挑戦したい。ほかにも、童話朗読にも興味がある。まだ時間はあるから、一つ一つ実現させていきたい。

■「賢治の世界」セミナー2024

14年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小中学校、高校を会場に開催しました。（市内18校19会場1,651名《昨年実績：15校16会場1,177名》）。大槌町からお越しくださった、佐々木格先生は、八重畑小学校、西南中学校で講演してくださいました。「人は変わることができる」、「世の中の変化に対し、宮沢賢治は生き方を変えた」というお話が印象に残っています。

■「賢治の世界」ワークショップ2024

10/19㈯ 「注文の多い料理店」100年
盛岡を訪ねて

当日は少し肌寒くあいにくの雨模様でしたが16名が参加し、大沢川原付近の「賢治清水」、詩碑「ちゃんがちゃがうまこ」の見学に始まり、盛岡城址公園の詩碑「岩手公園」、もりおか啄木・賢治青春館、岩手銀行赤レンガ館、中ノ橋通の斗米神社をめぐりました。賢治が生前出版した唯一の童話集

『注文の多い料理店』を出版した光原社にも立ち寄り、初めて訪れたという方もいらっしゃいました。案内をしてくださったのは、「盛岡・賢治の会」会長の佐々木陽さん。ゆかりの地の説明は分かりやすく、ときどき笑いがでるような和やかな雰囲気でした。

12/14㈯　賢治をめぐる清水寺、仙人鉄山（北上市博物館）を訪ねて

当日はとても寒い日でしたが17名の方が参加し、賢治が農学校教師時代に、教え子を連れて清水観音の夜宮へ行った事を詠んだ詩「境内」に登場する場所を巡りながら詩を読み解き、清水寺山門階上に安置されている三十三札所本尊を拝観しました。また、太田地区の農民に対する心情を描いた詩「住居」について解説して頂き、太田地区出身の参加者から当時の祭の賑わいについて貴重な思い出を聞くことができました。午後は北上市立博物館に移動し、特別展「北上線100周年記念仙人鉄山展」と民俗資料館に展示している賢治ゆかりのギンドロの木の標本を見学しました。

《特別展》のお知らせ

◆「紫紺染について」

期間　令和７年２月22日㈯～５月25日㈰

会場　特別展示室

「紫紺染について」は、盛岡の特産物「紫紺染」を復興させようと工芸学校の先生や町の紫紺染研究会の人たちが相談をして、かつて紫紺を取り扱っていたといわれている山男から、製法を聞き出すというお話です。直筆稿のほか、成立過程を示す資料などから作品の魅力に迫ります。

直筆稿公開期間

①２月22日㈯～３月２日㈰
②４月26日㈯～５月６日（火・祝）

◆「とっこべとらこ」

期間　令和７年５月31日㈯～９月28日㈰

会場　特別展示室

「とっこべとらこ」は大正10～11年頃に書かれたとされ、民話として広く語り継がれている「おとら狐の話」と盛岡地方に伝わる「斗米（とっこべ）とらこ」の伝承を結び付け、賢治独自の世界を展開している作品です。伝承では狐に騙される人間が描かれますが、賢治の作品は語り手の「私」が物語るという形式により、「昔」と「今」の二話で構成され、「狐が騙すのではなく人が勝手に誤るのだ」、という人間を風刺するといった視点で描かれています。民話から着想を得た創作として作品の魅力に迫ります。

直筆稿公開期間

①７月19日㈯～７月27日㈰
②８月９日㈯～８月17日㈰
③９月13日㈯～９月23日（火・祝）

※資料入れ替えのため特別展示室のみ閉室する日がございます。詳細は花巻市ホームページをご覧ください。

＊編集後記＊

花巻東高等学校で「賢治の世界」セミナーを開催した時、熱心に講師の方に質問をしている生徒さんがいました。今回寄稿をしてくださった佐藤さんです。数年セミナーを担当していますが、こういう生徒さんは珍しいのです。本当に宮沢賢治が好きなのだなと感じました。何より印象的なのが、受動的ではなく能動的に賢治作品に触れようとする姿勢です。佐藤さんのような方がいらっしゃると思うと、私はとても励まされます。（Y.S）